

# 大河ガロンヌ川によりそう ワインの都



月の港 ボルドー Bordeaux



ピエール橋

右の古地図(18世紀前半)からボルドーの街の特徴が見てとれます。

大きく蛇行するガロンヌ川に沿って街が広がっています。  
その形は三日月のよう。  
このため、街には「月の港」というロマンティックな名前がつけました。  
街はガロンヌ川に大きく開き、外周は城壁で囲まれていました。

ガロンヌ川は大河で、そこには橋が架かっていないことも分かります。  
初めての架橋は、1820年のピエール橋。  
ナポレオンの命によるもので、その後も150年にわたり唯一の橋でした。

ボルドーは、ガロンヌ河岸の港を中心に、舟運貿易で繁栄した街です。  
橋が架けられなかったのは、技術的な理由、軍事防衛的な理由、そして、  
大型帆船の航行に橋は邪魔だったからかも知れません。

ボルドーは大河ガロンヌ川によりそう街なのです。



ボルドーは、街のほぼ全域が、世界遺産に登録されています。  
登録にあたって評価されたのは、「新古典主義」の建築様式による街並みが、良好に残されていることでした。

新古典主義建築とは、18世紀後期に、啓蒙思想や革命精神を背景として、フランスで興った建築様式で、荘厳、崇高、という言葉があてはまる、虚飾を廃したデザインが特徴です。  
古代、特にギリシアの芸術が模範とされました。

それまでの装飾的・官能的なバロック、ロココの流行に対する反発といえ、ボルドーでは、ブルス広場や大劇場が、新古典主義の代表建築です。



ブルス広場



大劇場

ボルドーの街の歴史は、紀元前にまでさかのぼります。ケルト系ガリア人により開かれた街はブルティガラと呼ばれていました。紀元前1世紀にローマ帝国属州になった時、すでにアキテーヌ地方の中心地であり、大司教座もおかれたといひます。

帝国崩壊後は、ゲルマン民族ゴート族に支配され、その後、イスラム人やノルマン人などの異教徒の侵略に晒されます。

10世紀後半にアキテーヌ女公の婚家が、その後イングランド王家を継いだ(プランタジュネット家)ため、百年戦争終結(15世紀半ば)までボルドーはイングランド領となります。ボルドーワインは、ワインを産しないイングランドへの輸出によって大きく飛躍するのです。

17世紀半ばからフランス革命期(18世紀末)まで、ボルドーの街は経済繁栄の絶頂期を迎えます。この繁栄を支えたのが、ボルドー商人たちの拠点、ガロンヌ河岸の港でした。

ボルドーはワイン輸出だけでなく、サン・ドマング(Saint-Domingue・現ハイチ共和国)を始めとする西インド諸島のフランス植民地で生産された、砂糖やコーヒーそして奴隷などの中継貿易港として繁栄を謳歌します。

現在、川を外洋船が航行することはありませんが、当時の写真や絵画には、河岸に数多の帆船が停泊している様子が残っています。

絶対王政の絶頂期、ルイ15世の治世、ブーシェ(Claude Boucher)とその後任トゥルニー(Aubert de Tourny)が地方長官(intendant)を務めた1720年からの約40年間、街は大きな変貌を遂げます。

彼らは、オースマンのパリ改造に100年先んじ、ボルドーにおいて数々の都市改造を断行しました。城壁を取り払い、迷路のような旧市街に直線の大路を通し、ガロンヌ川沿いを見事なファサード建築で統一し、中世の街を近代都市に変えたのです。街には様々な様式のユニークな市門が残っています。城壁は取り除いても、門を残したところが特徴的です。

ボルドーは「小さなパリ」とよべれます。大河沿いに広がる街並み、4・5階建ての石灰岩を用いた街並み、長い歴史が重層的に連なる街並み、そして、要所には各時代の代表的建築がしっかりと残されている。これらが、小さなパリ、とよばれる所以ではないかと思いました。

## まちあるきの考古学



かつての河岸港  
ブルス広場前に大型帆船が停泊している



かつての河岸港の面影を伝えるボラード



● ボルドー



市門



市門



18世紀の都市改造により生まれた  
ガロンヌ川沿いのファサード建築

